

**子育て世代の社会人大学院生の就学環境づくりに向けての実態把握**

**－夜間大学院・健康科学専攻の大学院生を対象に－**

(代表者) 教養学科健康生活科学講座 教授 碓田 智子

(分担者) 同 教授 永井由美子

同 教授 岡本 幾子

**1. 本事業の目的と方法**

本学の夜間大学院・健康科学専攻には、看護師などの医療職、栄養士、福祉職、各種専門学校教員などの専門職に従事し、学齢期の子どもを抱えながら大学院に通う院生、とくに女性の院生が少なくない。子育て世代の院生が、夕食や団らん時に家庭をあけて夜間大学院に通うためには、本人の強い意志に加えて、職場の理解や家族の支えが欠かせない。しかしながら、現状では、子育て世代の社会人が夜間大学院で学ぶことへの社会的理解がまだ十分には育っておらず、子育てをしながら研究活動を行うための環境づくりが院生個人の努力に委ねられている状況ではないかと考えられる。

本事業では、子育て世代の社会人大学院生が就学しやすい環境づくりに資することを目的に、下記の3つの調査等を行った。なお、調査は本学の倫理委員会の承認を受けて実施した。

**1)夜間大学院健康科学専攻の修了生を対象とした質問紙調査**

郵送による調査を実施し、子育てしながら夜間大学院に通うことの課題、および家族や地域、職場の理解や支援の実態を把握した（回答者 26 名）。

**2)現役の夜間大学院の大学院生に対する質問紙調査**

就学上の課題や家族・職場の支援について、質問紙に回答してもらった（回答者 3 名）。

**3)子育てをしながら夜間大学院を修了した卒業生との座談会**

修了生 3 名に来学してもらい、子育てと研究活動との両立の課題、今後の夜間大学院の就学環境について、座談会型式による聞き取りと意見交換を行った。

**2. 夜間大学院修了生および在校生を対象とした調査から**

**1)子育て世代夜間大学院生の就学状況**

修了生 26 名と在校生 3 名の計 29 名（男性 7 名、女性 19 名）の回答結果から、90%が常勤職（大学・短大、病院・医療機関、専門学校、市役所などに勤務）として働きつつ、週に平均 3 日通学していた。授業がある時の帰宅時間は 23 時以降が 37%を占め、22 時以降を含めると 94%に達した。また、就寝時刻は深夜 0 時以降が過半数を占めた。就学時の子どもの年齢（複数回答）は、小学生と中学生が同じく 43%、ついで高校生が 36%であったが、乳幼児を抱える院生も 13%あった。

**2)職場・家族の支援について**

定時帰宅や時短あるいは仕事内容の考慮など、職場で具体的な対応をしてもらったのは 1/3 程度にすぎず、大半が同僚から励ましがあがる程度にとどまっていた。「大学院に通っても、職場の業務を優先するという旨の誓約書の提出を必要とした」という回答もあった。

子どもの夕食の準備や家事は、親や親族の手を借りる、配偶者が早めに帰宅する、週末

に集中的に家事をするなどでやりくりしていた。一方、家事サービスや食材配達などの外部サービスの利用者は殆どいなかった。

### 3) 子育てしながらの大学院生活について

大学院生活時に家事や子育てで困ったことがあるかを尋ねた結果、「問題はあったが何とかなった」(69%)、「とくに問題はなかった」(27.6%)と回答した。しかしながら自由記述では、「宿題をみてあげるなど、子どもとコミュニケーションを取る時間が持てなかった」「気持ちに余裕がない状態で子どもに接していた」「子どもの就寝時間が遅くなってしまった」「夜、子どもだけが家にいる時間ができてしまう」「子ども会活動に参加できなかった」など、子どもに対して十分なことができなかつたという負い目を抱いていることが窺えた。

その一方で、「社会人になった子どもが、母親の大学院での学びを評価してくれている」などの記述もみられた。また、「先生方の社会人への理解があったので、優遇されていた」「大学院の先生や友人に支えられた」「多くの先生方のご理解もあり、カリキュラムも柔軟だった」「院生どうしの交流やアドバイスで頑張れる気持ちを高められた」と、大学院の教員や院生仲間らの理解と励ましによって支えられたとの記述が多かつた。

## 3. 子育て世代社会人院生のための就学環境について

以上の調査結果を題材にし、修了生3名と座談会型式で、子育て世代社会人院生の就学環境について聞き取りと意見交換を行った。その結果、以下の意見が得られた。

- 1) インターネットを使った遠隔授業やゼミを取り入れている大学もあるが、対面での講義やゼミ型式の学びは非常に価値あるものである。通学の負担はあるが、それ以上に得るものが大きい。ただ、夏休みに集中講義があれば、その分、平日の通学負担が軽減される。
- 2) 子どもが小学生の場合は、夏休みなど学校が長期休暇の時のほうが子どもの対応に困る。また、普段の授業日でも、ときとして、家に誰も子どもをみてくれる人がいない日が生じてしまう。大学に子どもを連れてきて授業やゼミを受けたり研究ができるように、キッズルーム（アルバイト学生等が簡単な見守りだけをしてくれる）を設けてもらうなど、子どもの居場所があればよい。キッズルームに来て、子どもも自分の宿題などができる。
- 3) 社会人院生が、日曜日を含め、いつでも気軽に利用でき、研究や相互交流ができる居場所、大学が夜間大学院生を広く迎えていると感じられるような居場所を確保してほしい。

## 4. 今後の課題

子育て世代社会人院生の多くは、職場の支援が少ない中で、自身の努力と家族の支えによって就学を実現していることが明らかになった。また、大きな生活上の問題は少ないものの、子どもに向き合う時間が十分に取れないことに負い目を感じながら学んでいる実態が浮かび上がった。天王寺キャンパスで学ぶ夜間大学院・健康科学専攻の社会人院生の状況については、健康科学専攻担当の教員以外には、学内でもよく認識されていないと思われる。子育て世代の社会人院生への物理的な環境整備はすぐには対応が困難であるが、大学として社会人院生の要望を聞く機会を持ち状況を把握することが、就学サポートや本学で学びたい社会人大大学院生のニーズへの対応につながると考えられる。